

彙報

京都帝國大學講演會

京都帝國大學講演會は、本月一日より同大學に於て、第七回講演會を開く。講演科目中哲學に關係あるもの左の如し。

○教育行政法 法科大學教授 法學博士 織 田 萬

○現時の經濟問題 法科大學助教授 河 田 嗣 郎

○教育生理學、教育病理學及教育衛生學の概要 醫科大學講師 笠 原 道 夫

○希臘文明の世界的影響(幻燈使用)

内容 一、都市國家の盛衰 二、アレクサンドル大王
三、希臘文明の傳播 四、原始基督教との關係
五、近代文明に及ぼせる感化

文科大學教授 文學博士 坂 口 昂

○教育學の民族的研究

内容 一、民族的教育學に就て 二、教育の思想に關する民
族的傾向 三、教育の實際に關する民族的比較研究

文科大學教授 文學博士 小 西 重 直

○有理數、無理數並に虛數論

理科大學教授 理學博士 河 合 十 太 郎

○天文學一般

内容 緒論、地球、實用天文學、太陽、太陽系、月、星辰界
宇宙構造論、天體の形、光と熱、宇宙進化論

理科大學教授 理學博士 新 城 新 藏

東洋大學佛教普通講座

東洋大學にては、我邦佛教の研究が從來多く古典の研究に傾き現行の活ける宗派の研究に於て足らざる所あり、又佛教の根本的研究に對しては、西藏語の研究尙未だ幼稚なるの憾ありとなし之れ等の缺陷を補はんとて、今回新に佛教普通講座を開設し、來る九月十八日より講座を開始すと。講座担当講師及び科目略ぼ左の如し。

大無量壽經 同學教授 島 地 大 等

日蓮宗各派要義 同學講師 田 邊 善 知

眞言宗史 同 富 田 敬 純

眞言宗教義 同 加 藤 精 神

無門關 講 師 佐 々 木 珍 龍

西藏語 同學講師 河 口 慧 海

新著紹介

優生學 文學士 齋藤茂三郎著

近來我國に於て、ユウゼニックスに關する議論は屢々新聞や雜誌の上に於て見受けらるゝに拘はらず、之を其全體に亘りて組織的に論述したる著書に至りては極めて稀である。本書の出版は此方面に於ける缺階を補ふに於て頗る意義があるものと信ずる。章を分つこと三、第一章に於て人種改良の目的を論じ第二章に人種改良の原理を説き、第三章人種改良の將來に及むである。説明は

出來得る限り平易明晰ならむ事を力めてあり、殊に未だユウゼニ
 ックスの何たるやを知らざる人をして一讀其大綱を理解せしむる
 點に於ては極めて適當にして便利なる著書である。如何にも親切
 なる本であると云ふのも決して云ひ過ぎてはないであらう。末尾
 に詳細なる索引が——而も必要な限は原の英語をも加へたる
 ——あるのも行き届いて居る。著者が自ら云へる所の「比較的の
 思想に聞き社會一般人を刺戟して國家社會の生存上脚下の問題
 に注意を向けしめむとする」目的に對しては相當の成效が收めら
 れて居ると云ふ可きであらう。勿論かゝる目的を有したる本書、
 廣汎にして多岐なる題目を有すべき優生學を三百頁の冊子の中に
 約説したる本書に就いて、清新の獨創を求むるものがあるならば、
 それは聊酷に失すると云はなければならぬ。

併しながら、かゝる立場からして本書を見來つても、吾人はな
 ほ多少の疑點を有たぬでもない。

本書は其標題優生學の下に特に人類の遺傳と社會の進化と書き
 である。實に優生學を説く上に就いては、社會の進化と遺傳との
 關係を論ずるのは重要な事であると信ずる。然るに、吾人は本
 書の何れの章に於ても、此關係が説明せられてゐるのを認め得な
 い。遺傳變異の説明に百五十頁を費したる著者は何故に社會の進
 化又は社會進化と遺傳との關係にたゞ一節をも、否たゞ一の項目
 をも與へなかつたであらうか。著者が大體の範を如何なる學者に
 取つたかと云ふことは吾人が問題とする所ではない。これでは其
 掲げたる標題そのものにも背くことになりはしまいか。また、個
 人の發達に對する遺傳と境遇とのそれぞれの重要な程度如何は、

優生學の主張そのものに非常に重要な題目であると信ずる。然
 るに、著者が此問題に對して一瞥をも投じてゐられないのは、ど
 うも優生學の理論的構成を完了する所以に非ずと思はれる。これ
 らの根本的問題から姑く離れて見るとしても、なほ學士の社會學
 に對する見解には疑義を表明せざるを得ない。著者は「社會學の
 主なる目的は現在或は近き將來の社會狀態を改良するに在る」(四
 四頁)と云ひ、社會學や政治學は社會の安定と永續を圖るが目的
 である(四一頁)と説き、「人種改良學若くは優良人種學若くは優
 生學若くは善種學若くは民族誘善學と呼ばるゝ新なる學問は實に
 生物社會學の一部門をなすのである」(四四頁)と教へてゐられるが、
 吾人は不幸にして未だかゝる内容を有する社會學書の一冊社會學
 者の一人をも、見もしなければ知りもしない。従ひて著者が社會
 學と生物學との關係、生物學が社會學に與ふる警報として説かれ
 たる條々は皆的から外れて居る様に思ふ。

優生學は他までこれ一の政策の學である、*Spencer*の學に非ずして
*Sollan*の學である。もし、人類の種を此の如くにして改良せよと
 教ふるに非ずんば、その獨立なる存在の理由はない。單に云々の
 親の結合は云々の子孫を生むべしと云ふに止まるならば、それは遺
 傳學又は遺傳研究の一分枝を形成するに過ぎない。種の改善の規
 範を有し其實現の爲に必要なる方策を説くに於てこそ一の獨立せ
 る優生學を形成する事が出来るであらう。此意味に於て本書の骨
 子は實に第三章人種改良の將來の一章にありと見なければなら
 ぬ。然るに吾人は此章に於てもまた一の重大なる疑問を有せざる
 を得ざるを悲しむ。吾人は優生學の根本原則として優秀者の増加、

劣等分子の消滅又は減少を認めざるを得ざる事と思ふ。現に著者も「後世子孫の性質を改良する事に關する」「手段は實に人種改良學の與らむとする所のものである而してその手段を運用するに就いては自然二種の方途がある——(一)有能階級の出産率を高めその結婚を奨励する事に關するものと(二)不能力者の出生を斷絶することに關するものとこれ」(二五五——二五六頁)と説いておられるのにも拘はらず、其他の部分に於ては優秀者の増加に關し殆んど何等の顧慮をも拂つておられない。而して「人種改良學の實際問題は人類の重荷たる精神及び身體上の惡素質の後現を如何にして減じ得可きかと云ふにある」(二三六頁)と大膽なる言明を敢して居られるのを見る。一言にして盡せば、著者の Eugenicis は即 Negative Eugenicis 及び Positive Eugenicis は之れを含まない。吾人の眼から見れば人は即ち男にして女はこれ含まず、水はこれ即湯にして冷水は含まれずと云ふのと全然同一の議論の様に思はれる。優生學が前述の兩面を有する事に就いては、吾人不敏にして何等の疑問をも抱き得ない。ことに其創始者 Galton が天才の研究に一世の心血を傾注したる精神から見來るならば、彼に於て重きをなしたるものは寧ろその positive なる方面であつたと考へられる。殊にそが一種の宗教的熱誠と猷身の念とを以て主張せられむがためには、どうしても文化の發達を最高の價值となし、従ひて優秀者の増加を第一の信條となさねばならぬ運命をもつ者と思ふ。此特に重要な方面の主張が本書に於て殆んど顧みられない形にある事を吾人は如何にも解し難い。併し、著者自身には恐らく別に深い考がある故の事であらう、吾人は切に、其

垂教を惜まれざらむ事を望む。

詳細の點に就いてはなほ少しく述べたい事もあるけれども今これを省略する事とする。以上は特に本書に就いて述べた事であるけれど、吾人はなほ本書に就いてのみならず、一般に優生學の主張そのものに關してなほ多少の、而も根本的の疑問を有する一人である。胸中此疑義を懷抱すること既に約八年、遺憾ながら未だ一度も之を公にして識者の高教を仰ぐ折を有しなかつた。今幸に此機會に於て之を開陳したいと思ふ。便宜上疑義を述ぶるに、多くは敢て、獨斷の形を以てする無禮を、寬恕せられむ事を望む。

想起すのは明治四十四年の秋十月、私は專攻を同じくする學友二人と共に枯れたる芝生に鼎座しながら優生學を語つた。一人の學友は Eugenicis を以て Ernois Galton がその family pride を満足せしめむがために唱道したるものに過ぎぬと極論した。私は素よりかゝる極端の意見を斥くるけれども、優生學の根本の主張そのものは未だに此頭に明かでない。何故に人種を改良せざる可からざるか、此第一問題に對する解答を得むがために私は優生學に關するいくらかの著書と論文とをあきつた。求めに求めて而も何物も與へられない。齋藤學士の本書に就いてまたその解答を得んとしたけれども、此問題に關してはたゞ「恐らく眞面目に考ふる人は誰しも國家社會の爲めに善良の家族の繁榮を希ひ、劣劣の家系を救済せんと志さぬはないであらう」(一九四頁)と云つて居らるゝだけである。何故にと云ふ吾人の要求に對しては一言も與へられない、優秀なる分子の増加、劣等なる分子の減少の希求すべき事は自明の眞理であつて説明を加ふ可き事ではない様に取扱

はれてゐる。しかしながら、吾人の第一疑問は此點に存する。

何故に優種の増加を計るべきや。劣種を絶滅すべきやと云ふ根本問題にして、充分なる説明を與へられざる限り、優生學の主張は根のない幽霊の様なるものに過ぎぬ。優生學の唱導者は社會の發達文化の進歩（二者を同一の意義に於て用ふ）を以て無條件にそれ自體理想とすべきものと考へ、その爲めには種を優良ならしむべしと主張する。文化と優種との間にかゝる必然的一義的聯絡の存在するや否やはもとより一の疑問である。種の如何と云ふ生物學的因子以外、社會の組織がまた一因子として文化の進歩の狀況を決定する事は争ふべからざる事實である。然らば、文化の進歩に對して、二因子のそれぞれに有する決定的意義如何、一因子の改良は他の因子に如何なる影響を及ぼすや、此等の問題にして解決せらるゝに非ずば、文化の進歩のために優種の増加は計るべしと云ふ結論は生じ來らない。然れども、これは勿論大問題であつて、今勿忽に決し得らるべき所ではない。今はたゞ一步を譲つて種の良否を文化の進歩に對する唯一の決定因子と見る事としながら論歩をすゝめる。

種の改良の要求の當否は一にかゝつて文化の進歩が政策論上の最高價值なりや否やに存する。多くの一般の人人は容易に、顧して何の狐疑する所なく此中の後の問を肯定するであらう。然れども、何故に社會は文化の進歩を希はざるべからざるか。吾人はこれに對して何の理由をも發見する事は出來ない、而して優生學の唱導者の吾人に此理由を語り得ざるのもまた當然の事と思はれる。若し、文化の進歩が最高の價值なる事は自明の事なりと説く

ものあらば、吾人は敢て問いたい。同様にして何故に、自由は最高の價值たり得ないか、個人的幸福は最高の價值たり得ないか、否種の改惡その事すらも最高の價值たり得ないか。何等の理由なくして、文化の進歩を理想と立てる人人に對しては充分にこれ丈の水掛論をなし得ると思ふ。

否一步をすゝめて次の如くに言ふ事ができると思ふ。優生學の主張の背後には蔽はむとして蔽ふべからざる貴族主義的香景が存在してゐる。社會に於ける文化的遺傳的貴族の血を純潔にして、その混和を防止する事、餘りに劣等なる血に對しては其絶滅をすら希求する事、何人か之を以て一種の貴族主義的思潮でないものと云ひ得やう。爵位の貴族、黄金の貴族、權力の貴族、勳章と佩劍との貴族では勿論ない、しかしたゞ出生によりてのみ獲得し得可く努力によりて獲得すべからざる所有物——才能——に重きを置き代々その少數者によりてのみ獨占せられむ事を熱望する根本精神、これが一種の貴族主義たる事に於て一點の疑もない。社會生活に於ける最高の價值の何ものたるかは思ふに、倫理學——形而上學に根基を置く——によりて解答を與へらる可き問題である。而して、今日の倫理學は吾人に他人を自己目的として、人格として取扱へと云ふ事を命令する。而して、現代の社會進化の趨勢は正に此要求に自らにして應ずるものと見るべきである。此趨勢に逆行し、此思潮を無視して吾人はかの貴族主義的精神に従ひ文化の進歩を以て最高の價值と認む可き何の理由を有するであらうか。

以上はたゞ優生學の根本的前提に對する疑問である。吾人は更

に一步を進めて、優生學の主張する方策其物の吟味に入りたいたと思ふ。元來今日の優生學の内容は齋藤學士の著書によりて知らるゝ如く、人類の遺傳に關する數多の起述説明を包含する。しかしながら、勿論これは優生學の主要なる部分であるべきではない、寧ろこれは遺傳學の一部門を形成すべき事前述の通りである。優生學の主要部分は其人種改良に關する方策に存する。而し此の方策には前述の如く少くも二方面がある。先づ其の消極的方面即ち劣等分子の除却と云ふ事から考へらる。優生學は社會の劣等なる分子をして永久に其子孫を残さざらしめむがために、重に隔離法、絶産法(本書二三七頁参照)等を主張する。その實行難は吾人これを認めるが其實行さへ出來れば效果の擧ると云ふ點には何の疑をも有しない。併しながら劣等分子の除却は吾人の道德意識に何等背く所なきものであらうか。今日の社會組織家族制度の下にありては、少數の例外を除いては何人も子を有せむとする欲望父母たらむとする欲望を有してゐる。然るに社會のためとは云へ、子孫を残す事勿れと云ふのはこれ、明に其欲望を無視する事である。彼を以て全然一の手段と化し去る事である。勿論彼れ自身犠牲の精神によりて自ら進むで此舉に出づるならば吾人と雖も何の異論もない。また、自己の意志によりて社會に毒毒を流し不幸を齎す犯罪分子に對し、一種の刑罰としてかゝる方策に出づる事は、今日の刑罰制度を是認する以上、是認しなければならぬと思ふ。併しながら、自ら子孫を残す意志を有し、而も、何等の罪惡を有せず、たゞ生れながらにして社會の弱者たる可き能力を有する分子に對し、威力を以て其欲望を壓迫するのは吾人の道德意識と容れ

ざる事甚しいと考へなければならぬ。況んや優生學の唱導と同一の前提に立つとしても劣等分子の除却と云ふ要求の當否は抑疑問である。

劣等の英字はその劣等なるが故に棄て去るべしと云ひ得るけれども、劣等の人は劣等なるが故に其種を廢棄すべしとは云ひ得ない。手段たるものと目的たるべきものととの區別は此點に存する。劣等の種を絶やすには當然其理由が劣等と云ふ事以外に存しなればならぬ。即ち、文化の進歩に障礙ありと云ふ事である。しかしながら續りて思ふ、文化の進歩とは其社會に於ける最も劣等者の享有する文化の發達なるか、斷じて然らず。白痴の無智なる點に於ては原人と文明人と少しも選ばない、然るに一方の文化は他方の文化よりも遙に高い。これ文化の程度は天才によりて創造せられ民衆によりて模倣せられたる文化内容によりて決定せられ、最低級にある人々の文化内容によりて決定せられないからである。今日の劣等分子をして充分に繁殖せしめても、文化の進歩がその爲に遅々たる理由は寸毫も存しない。もしそれ、劣等分子の除却を社會の維持團結のために必要なりと云ふものがあるならば答へて云はむ。古來如何なる社會が白痴と低能者との多きに苦みて滅亡したるものぞ、かゝる劣等分子が社會の他の成員に對し一の負擔を與へ障礙を形るは例ふるに山河の人類の活動に對する障礙をなせるが如し。然れども、何れの國民か山河あるが爲に亡びたる。社會の事は複雑多端因果は單純ならず、山河は障礙たりしと共にまた進歩の原動力なり、社會の劣等分子の存在は一方多少の障礙なりし事明なるも、また必ず其維持團結の爲に貢獻せし

事甚だ大なるものありしならむと。

優秀なる種を増加せしめむとする優生學の方策に至りては自殺的である、自己矛盾である。劣等分子除却の方策は必ずしも不可能ではない、吾人はたゞその無意義なるを疑ふに止まる。優秀分子増加の方策に至りては自ら滾を掘つて其中に溺れ、自ら火を放つて其中に投ずる趣がある。たゞに無意義なるに止らずして全然不可能である、と云ふよりも愈其目指する所に背馳せむとするものである。優秀なる分子の増加の方策としては一夫多妻制度を主張せざる限り、適當なる結婚——優秀分子の結合による外はないと考へられてゐる。併し吾人の見る所を以てすれば、これ社會の中より漸次に優秀の種を滅し盡すものである。才能ある階級に於て出生減少の特に著しい事は文明國共通の病弊である、而して益著しきを加へむとする病弊である。これは才能そのものゝ故に生ずる現象ではない、才能ある男子が社會的地位を高め得るが故に生ずる現象である。今優秀の男子に配するに優秀の女子を以てせよ、優秀の種は男女に於て共に亡びる、優秀の男子を凡庸の女子と凡庸の男子を優秀の女子と配せしめよ、優秀の男子の種は減ずべきも優秀なる女子の種は亡びない。結局優生學は優秀の種の自殺を教ふる學であり、同時に優生學自體の自殺を意味するものであるまいか。かくて、今日の自然に放任したる結婚方法は遙によく優秀の種を保存する方策である。然れども吾人は一步を進めて考へなければならぬ。よし優種學の方策が優秀の人を多く生ずる結果を齎すにしても、その事自體に果して幾何の意義があるであらうか。社會は一方に於て特に優秀なる小數人、他方に於て

多數の凡庸人に相分れる。恐らく自然其間に漸次婚媾的結合の絶ゆるのを見るであらう、二三又は以上のカストは形成せられざるを得ない。此の如きは所謂社會進化の逆轉と見るべきではなからうか。これ一の結果である。又かくて社會に少數の優秀分子を擧げ得るとしても多數の凡庸人は依然として存する。如何にして社會全體の遺傳的素質を平均的に向上せしめ得たりと稱し得るであらうか。Puritanic はないかも知れない、其所期する所の平均的の向上は求む可くもないと信ずる。これ他の一の結果である。

以上簡單ながら一通り、優生學に對して久しく抱き來つた疑問を開陳する事を得た。談多岐に亘りて齋藤學士の本書の内容よりは遙に縁遠き方にまで外れたのは勢、已を得なかつたのである。學士の著書によりて此疑問を述ぶる機會を與へられたる事に對しては深く感謝の意を表すると共に、切に學士の高教を仰いで此蒙の啓かれむ事を望む。妄評多罪。(定價一圓二十錢 不老閣書房發行)(高田保馬)

哲學汎論

文學士 木下四郎一著

本書は緒論に於て哲學の定義、分類等につき述べ、本論に於て哲學上の諸問題を掲げて著者一流の解決を試み、次に古來の哲學上の諸説を簡單に列擧し、最後に結論として著者の所謂哲學研究法と哲學的宗教なるものを論じて居る。

立論叙説凡べて在來の此種の著述とは頗る類を異にして居て、哲學上の術語や、問題や、諸家の學說やを忠實に紹介して、斯學入門の士の手引としようと思ふよりは、寧ろ著者自身の意見や、